

## 田中琢三「中原淳一と1950年代初頭のパリ」

1951年（昭和26年）4月、売れっ子のイラストレーター、服飾デザイナー、あるいは雑誌編集者として多忙を極めていた38才の中原淳一は、仕事の疲れを癒すことをひとつの目的として、当時の日本人にとっては決して容易ではなかったパリ行きを実現させた。中原は翌年6月に帰国するまで約1年2ヶ月に渡ってパリに滞在するが、その間に、自らの雑誌『それいゆ』と『ひまわり』のために、パリの人々のファッションや生活文化に関する記事やイラスト、パリ・モードを取り入れたデザイン画などを日本に送り届けている。本発表では、まず、これらの雑誌に掲載されたパリ関連の記事を検討することによって、中原がパリで何を見て、何を感じ、日本の読者にパリのいかなる側面をどのように紹介したのかを明らかにしたい。また、1950年代初頭にパリに滞在した著名人として、女優の高峰秀子、高橋とよ、映画監督の木下恵介、作曲家の黛敏郎、シャンソン歌手の高英男、石井好子、作家の三島由紀夫らがいる。ここでは、中原の2か月後に渡仏して彼と同時期にパリに滞在していた高峰秀子に注目し、彼女のエッセイ『巴里ひとりある記』（1953）などを参照しながら、敗戦後間もない時期に渡仏した日本人たちが、パリに何を求め、何を得たのか、そして、戦後日本におけるパリのイメージにどのような影響を与えたのかを考えてみたい。